

山は泣いている?中山間地域が抱える諸問題。

人口の推移

昭和35年……※1 **96,769人**
 浜松市全域…568,214人

↓

平成17年……※1 **52,079人**
 浜松市全域…804,032人

↓

平成25年……※2 **36,391人**
 浜松市全域…812,888人

高齢化率 **38.36%** ※2 浜松市全域
 ……24.04%

日本の65歳以上の高齢者人口は、過去最高の3,186万人(前年3,074万人)
 高齢化率は25.0%(前年24.1%)
 総務省統計局高齢者の人口(平成25年9月15日現在推計)から

※1 浜松市中山間地域振興計画「山里いきいきプラン」(平成22年3月)から
 ※2「住民基本台帳による人口と世帯数」(平成25年10月1日現在)から

鳥獣被害トップ3 (捕獲頭数)

イノシシ…… **1,681頭**

ニホンジカ…… **651頭**

サル…… **152頭**

野生鳥獣による農産物被害の深刻化により生産者の営農意欲が低下、鳥獣の活動エリアがさらにひろがり負の連鎖を生む。狩猟家の高齢化も進んでいる。

浜松市が許可し、捕獲された有害鳥獣頭数(平成24年度捕獲分)

中山間地域に忍び寄る危機

- 人口の減少
- 高齢化
- 耕作放棄地の増大
- 空き家の増大
- 森林の荒廃
- 鳥獣被害の発生
- 伝統的祭事の衰退



「交流」が
 キーワード。

「ひとつの浜松」の中山間地域

おだぎり とくみ

明治大学農学部 小田切 徳美 教授

農政学・農村政策論研究の第一人者として政府関連の審議に関わり、大学で教鞭をとる小田切氏。講義や著書では、浜松市を地域づくりや農山村再生の事例として紹介するケースがあり、市との関わりも深い。今回、浜松市の中山間地域についてお話を伺う機会を得た。

未来のヒントがここにある。

浜松市の優位性

日本における人口流出や高齢化、医療や買い物など生活上の諸問題を先行して抱える農山村と言われる地域が、浜松市では「中山間地域」にあたる。地域再生に挑む先発事例としての経験を備えた地域であり、浜松市の未来にとって重要な意味を持つと教授は説く。

さらに「浜松市は都市部から奥深い山村地までの街並に多様性があり、日本の中山間地域を代表するような農山村再生の試みを、市内で体験できる。これは他市にはない特徴であり、市民はこの優位性を享受してほしい」と語る。

空洞を交流で埋める

中山間地域の集落機能消滅までの過程は「人、土地、むら(集落)の三つの空洞化」で表現され、ある時点に達すると、急速に集落機能が後退する「臨界点」がある。この地点に行き着く前に、懸命の対策が必要だという。そして、表面的な三つの空洞化に加え、問題の根底にあるのは住民自身が地域に住み続ける誇りを失ってしまう「誇りの空洞化」だと教授は考えている。

そこで、教授が重要視するのは「都市農村交流」。都市部の住民は農家民泊や農林業体験などの交流を通じて自然、文化、暮らしの知恵を学ぶことができる。招かれる側の感動に加え、招く側も「気づき」があり、双方の人的成長の機会でもある。これを中山間地域の宝を鏡として映し出す「都市農村交流の鏡機能」という。特に子どもたちの鏡は、地域の宝をピカピカと映してくれる。「素直な子どもたちを日本の中山間地域あちこちに送り込んで、輝かせられたら素晴らしい」と教授の目も輝く。

地域の新しいコミュニティ

天竜区の熊地区は、地域住民で村おこし事業を興し、20年以上活動が継続されている。現在、食事やそば打ち体験、土産販売を行う道の駅として運営されている。

地域意思決定の場に「戸」票制から「人」票制に移行した例(寄り合いなど)に参加する多くが各世帯代表の男性であったところに女性若者の参加促進が図られた。外部との刺激や繋がりがここから生まれている。イターン(外部の人)に刺激されイターンを決定した事例もある。「浜松にはこのような「地域が生まれ変わる過程」の姿が見えるので今後に期待が持てる」と教授は語る。

「先進国」日本はどいへん?

また「先進国で農山村の人口減少が進んでいるのは日本だけ」という話題が印象に残った。イギリスでは現在、リタイア組だけでなく若い家族層にも農山村への移住・定住を希望する「逆都市化現象」が見られるという。これは流行ではなく、彼らが農山村の真の価値を認識しての動きだそうだ。産業革命が起こり、資本主義がいち早く浸透した先進国の成熟した姿なのだろうか。その国を見本にして産業や経済を追ってきた日本が現在のイギリスの農山村に対する価値観を同じくするには、どれぐらいの時間が必要なのだろうか。

柔軟な発想が未来を拓く

農山村の維持・再生に対し撤退論も存在する。「条件が悪く不経済」になるものは仕方がない」といった議論だ。しかし、イギリスの事例のように、日本人の多くが中山間地域の価値を再認識する時代が、将来訪れるかもしれない。次世代が活躍する可能性のある地域を私たちがつぶしてしまつていいのだろうか、と教授は唱える。

最後に、教授から「天竜地区は都市文化のさまざまな機能を保持しています。ここに都市部からの観光客を停留させ、中山間地域を紹介するツアー企画などによって、ハブ機能(※)が充実してくと面白いですね」と、「あかるい浜松」のヒントをいただいた。

今回の取材を通じ、教授のような柔軟な発想を持った市内外の人材が人と人、地域と地域を結ぶ力を発揮し、局面を変えていくのだろうと感じた。同時に、浜松市民は「ひとつの浜松」としての中山間地域に学びや気づきを見出し、いくことが宿題であると受け取った。

※航空網の中枢を役割とする空港を「ハブ空港」と呼ぶように、浜松市の南北交流の中枢拠点を表現したもの。



小田切 徳美

1959年神奈川県生まれ。農学博士。東京大学農学部卒業。同大学院博士課程修了。高崎経済大学経済学部助教授、東京大学大学院助教授などを経て、2006年から現職。ふるさとづくり有識者会議座長(首相官邸)、国土審議会委員(国土交通省)、過疎問題懇談会委員(総務省)などを兼任。主な著書に、『農山村再生』(岩波書店)、『農山村再生に挑む』(編著、同)、『地域再生のフロンティア』(共編著、農文協)などがある。

